

今昔物語 二六冊

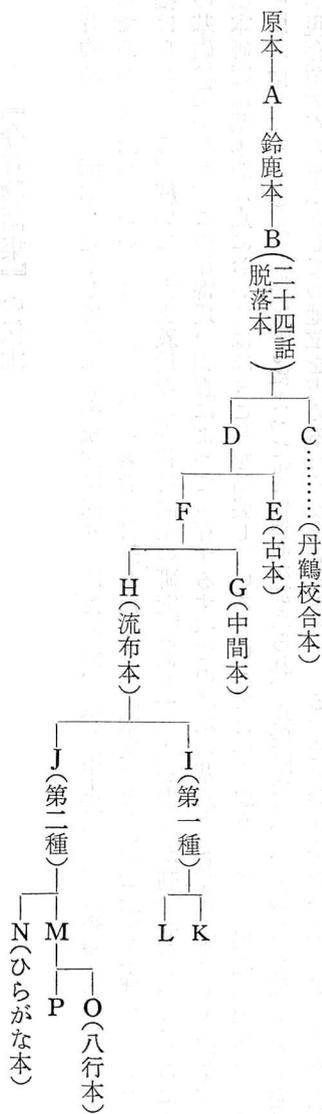
阿部 秋生・小嶋 仁子

本書「今昔物語」二六冊は、「黒川文庫」の中の一つとして本学図書館に襲蔵せられているものである。今日『今昔物語集』の伝本、書写関係はほとんど明らかになっており、本書はその諸伝本の中で古本系と称せられる一群に属する。一応は、既に、学界にも紹介されているものではあるが、今回新にその調査を行った結果を報告する。多少従来の説明に、附け加えることもある。

一 『今昔物語集』の伝本

『今昔物語集』の伝本研究として諸本を系統的に採り上げたのは、坂井衡平氏の『今昔物語集の新研究』（大正一二・誠之堂書店）が最初であったと云っている。この書には、「著者の目撃したる伝承的本文」として二二本を挙げて解説を施してあり、伝本系統表も掲げられている。続いて片寄正義氏の『今昔物語集の研究』（昭和一八・三省堂）が刊行せられ、これらによって、今日の伝本研究の基礎は築かれた。この片寄氏の調査によって現存するすべての諸本の基点とされる伝本として鈴鹿本の位置が確立され、以後の伝本研究は基本的な点においてはほとんどこれを踏襲しているといつてよいと思う。以後、馬淵和夫氏の『今昔物語集伝本考』（『国語国文』昭和二六・四）その他の論考によって更に検討が加えられ、現段階では、今後新しい系統の本が発見されない限り、鈴鹿本が現存諸伝本の祖本としての地位を占めるだろうと考えられている。その鈴鹿本に最も近い系統の本文をもつものを古本系とし、その古本系ならぬ本文をもつものを流布本系と称し、かつその古本系から流布本系の本文に変わってゆく途中の形のものの中間本と称している。

この、従来の諸本の関係を日本古典文学全集『今昔物語集』（昭和四六〜五一・小学館）の解説（馬淵和夫氏担当）では、次のようにまとめている。伝本全体の見たしのため、これを借用して掲げておく。



『今昔物語集』の伝本系統は概ねこのような状況にあるわけだが、本学所蔵の二六卷（冊）本は、その各卷すべての本文が古本系というわけではなく、卷一、卷二、卷三、卷四、卷五、卷六、卷七、卷九、卷十、卷十二、卷十三、卷十四、卷十五、卷十六、卷十七、卷十九、卷二十、卷二十二、卷二十七の一九卷の本文だけが古本系統で、その他の巻の本文は流布本系統である。

従来の伝本研究史上、本書の名がみえるのは、前掲の坂井衡平氏の著書の中に、同氏が目撃したとする二二本以外のものとして、「黒川家蔵古写本二十七卷」（実際には二六卷）なるものが紹介されている。これが本書をさすものと考えられる。この程度のこととて、おそらく「目撃」して調査することまではしていなかったであろう。その後、山田孝雄・忠雄・英雄・俊雄の諸氏による日本古典文学大系『今昔物語集』五冊（昭和三四〜三八・岩波書店）の第三冊の諸本解説（山田忠雄氏担当・昭和三〇）（以下大系本と略称する）に初めて採り上げられて紹介使用されるまでは、その名称も、その本文の状態も、学界には殆ど知られていなかった、少くとも、それほど重要視されてはいなかったものである。

一 本書の書誌

本書は、本学図書館の黒川文庫所蔵の写本である。現存するのは卷一、卷二、卷三、卷四、卷五、卷六、卷七、卷九、卷十、卷

十一、卷十二、卷十三、卷十四、卷十五、卷十六、卷十七、卷十九、卷二十、卷二十二、卷二十四、卷二十五、卷二十六、卷二十七、卷二十八、卷二十九、卷三十の二六卷二六冊で、卷八、卷十八、卷二十一、卷二十三、卷三十一の五巻が欠けているが、このうち卷八、卷十八、卷二十一の三巻は現存諸伝本のいずれにおいても欠本となつてゐるものである。文字は漢字と片仮名とで、宣命書風に、送り仮名を小字二行割に書いている。縦二九・七糧、横二〇・九糧、袋綴、楮と思はれる料紙を用い、表紙は紙表紙で、色は薄茶色に見えるが、本来は黄色であつたものが汚れてこの色になつたものようである。

表紙の右上部には、「物語」という文字を朱の丸で囲んだ朱印が捺してある、これは全巻に共通している。また、卷一の表紙の「物語」という朱印の左に朱筆で「共二十六」と記し、またその傍に墨で、

昌平御庫本校合

符谷校齋本校合

鈴木安覚本校合

と並べて記してある。

外題は表紙左上部に打付書で「今昔物語一」、内題は「今昔物語集巻第一」というように記されており、以下各巻は、巻の数字が変わるだけで全巻共通した形式である。但し、卷三、卷九、卷十五、卷十九、卷二十五、卷二十八の六冊では、外題の「今昔」の文字が「今昔」と左右逆に書かれており、また卷二十九では、外題の「今昔」の文字が草書体で書かれている。また、卷二、卷三の内題には墨書の「二」「三」の数字がなく、他本との校合の結果を示す朱筆で書入れている。

またこの表紙の裏(表表紙見返)に、墨で、

八十八 廿一 廿三 (冊) 欠本

と記した貼紙がある。但し、卅一とそれを囲んだ丸は鉛筆書で、後筆と思われる。

全巻を通して遊紙は、表紙と目次との間に一丁と、本文の後に一丁と計二丁ある。この最初の遊紙の裏や表紙裏(卷七・卷九)などに、本文中にみえる難解語句かと思はれるものが数例掲げられている。たとえば卷一(遊紙裏)には、

○健歩○金蹄○菘水カサキ菘カサキ也敗也○筆掃竹也箒也○鑊鼎大而無足曰一○擯棄也○御月物ミツキモノ

の如きで、頭に朱丸印を加えた墨書である(口絵写真参照)。これが見られるのは卷十まで(卷七を除く)で、それ以降にはない。また卷一にはその遊紙裏の左に寄せて朱筆で、ここにも、

昌平御庫本 官記

狩谷望之藏 校記畧木 鈴木安覚藏 東記

と、表紙に記された三種の校合本と、その略号とを示してある。

紙数と一面行数は次表のとおりである。

第一表

卷	紙数(丁)	行 数	
		目 録	本 文
一	81	9	9
二	46	8	9
三	69	8	9
四	70	9	9
五	74	9	9
六	63	9	9
七	61	9	9
八	(欠)
九	72	9	9
十	79	9	9
十一	156	8	8
十二	84	9	9
十三	69	9	9
十四	73	9	9
十五	78	9	9
十六	94	9	9
十七	70	9	9
十八	(欠)
十九	93	9	9
二十	76	9	9
二十一	(欠)
二十二	20	8	9
二十三	(欠)
二十四	156	8	8
二十五	49	11	11
二十六	145	8	8
二十七	76	9	9
二十八	94	11	11
二十九	91	11	11
三十	41	11	11
三十一	(欠)

①この表の「紙数」とは、表紙二丁、遊紙二丁(巻十五は一丁)を除いた総数である。

②「行数」は、前述本文の系統と関係があり、本文を一面九行に書いてある一九巻の本文が、古本系統の本文である。

③丁付は巻十一と巻十二とにあるだけである。ただし、目録の丁付は巻十一、巻十二とも第一丁から第三丁までのすべてにあって、本文の丁付は、巻十一では第六十丁までで中断しており、巻十二では第八十一丁、つまり本文の最後までつけてある。

蔵書印は三種で、すべての巻の第一丁オ、つまり目録の最初の部分にある。そのうちの二つは黒川真頼の蔵書印で、

①朱字・陽文体・長方形(縦四・五横、横一・五横)・単郭で「黒川真頼蔵書」とある。

②朱字・陽文体・円形(直径約一・八横)・単郭で縦二行に「黒川真頼」とある。

もう一つは黒川真道の蔵書印で、

③朱字・陽文体・長方形(縦四・五横、横一・五横)・単郭で「黒川真道蔵書」とある。

目録は一九巻のすべての巻にある。本文と目次末との間隔は次の四種類に分かれる。

①目次最終丁の次の丁から本文になるもの。

卷一、卷三、卷六、卷七、卷九、卷十、卷十一、卷十二、卷十三、卷十九、卷二十七、卷二十八 以上一二卷
⑥ 目次最終丁の次の頁から本文になるもの。

卷二、卷四、卷五、卷十五、卷十六、卷二十二、卷二十四、卷二十五、卷二十六、卷二十九、卷三十 以上一一卷

⑦ 目次最終行の後一行分の空白をおき、すぐ本文を記すもの。——卷十四

⑧ 目次最終行の次行から本文を記すもの。

卷十七、卷二十 以上二卷

つまり⑧と⑨がほぼ同数で、最も多い。また本文を丁の裏からはじめているのは⑩に三例、⑪に一例あるだけで、あとはすべて丁の表からであり、本文は新しい丁から始めるとする方針が概ね守られていたと考えられる。

目次の話の標題の後の話順を示す「第××」という番号の欠けているものが、卷二、卷三にある。ただし卷二では、第一話と第二話、卷三では第一話から第七話までには番号が入っている。目次の標題に話順の番号のないものは、本文の標題にも同様にこの番号が入っていない。またこの話順番号が、標題の追加によってずれたものも卷九、卷十一、卷二十七、卷二十九にあるが、中には朱筆で訂正されているものもある。

いま一つふれておくべきことは、本文中に頻繁にある空白（欠文）の問題で、これに類するものとして、従来から『今昔物語集』の欠文の研究が行われているが、ここでは本書の空白の存在を明示しておくに止める。所謂欠文という形だけでなく、空白ということで一括して次の四種に分類してみた。

① 話が全く欠けている場合。

② 話が完結せずに中断している場合。

③ 話と話の間に空白が存在する場合。

④ 一文、一節、一語句など多少に拘らず空白が存在する場合。

これらの分布を表にしてみた（次頁第二表）。①②は話順の番号、③④は空白箇所の数を示す。

①では各々標題だけがあって概ね一丁以下の余白が置かれているが、卷十九の第十六話、第三十四話には標題も脱落している（目録にはある）。また卷二十九の第十六話では、目録の該当箇所の頭注に「有標無本文」とある。これは②の型に属する空白にもみられることで、卷二十八の第三十六話の目録の頭注に、「写本如此末文落敷」とあり、卷三十の第六話、第七話にも「末句不足」とある。③は、卷二十八、卷二十九に集中している。④は、卷十五以降のすべての巻にある、それに比して卷一から卷九までに

は、あることはあるが、その数は非常に少ない。

第二表

卷	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ
一	20・24			
二			5	
三			1	1
四		23		9
五		13		1
六		7		5
七	33~40	43		
八	(欠)			
九				
十		3		54
十一	17・19・20・33・34・37	3・18		82
十二				
十三				
十四				
十五				29
十六				35
十七		42		13
十八	(欠)			
十九	15・16・34	33		63
二十	8・14		1	21
二十一	(欠)			
二十二				7
二十三	(欠)			
二十四	12・17			59
二十五	8・14		すべて	6
二十六	6			41
二十七		14		28
二十八		36	22	9
二十九	16		24	41
三十		6・7	2	27
三十一	(欠)			

本書には奥書の類は全くない。従つて、本書の伝来・書写の年代等については、推測すべき手がかりもないが、筆蹟、紙質等からみて江戸時代も半ばすぎの書写かと思われる。だが、その本文の系統、異文校合の跡からみると、いわゆる古本系統の本を含む伝本を書写し、かつ諸本と比較して本文を校訂しようとしたもので、概しては良好な本文の巻が多いといふことができよう。

三 本書の性格

以上が本書の書誌的な説明であるが、本書の性格として改めて考えておきたいことは、既に紹介した三本の校合のしかたについてである。特に本文に深く関わる問題かどうか未だ判断を下しにくいのが、ここで一応その校合部分の分布状況その他の調査結果を

示しておく。

第三表

本 名 卷	官	東	木	東 ・ 木	東 ・ 官	官 ・ イ	東 ・ イ	木 ・ 東 イ	東 ・ 松	東 ・ 松 イ	東 ・ 目 六	松	松 ・ イ	丹 鶴 本	印 本	一 本	目 六	頭 注		
一			3	94				14									44	79	8	
二	25	25			56	9	1										4	25	2	
三	39	52			86	36											6	64	5	
四	23	60			66												1	77	2	
五	35	50			83													48	11	
六	133	74			104												5	233	6	
七	25	38			36												2	87	4	
八		(欠)		
九	55	66			119												3	219	2	
十	51	52			21												2	150	6	
十一	2	3			1									2				36	3	
十二																	27	31		
十三																	8	56		
十四																	7	21		
十五																	5	22		
十六		3															5	32	1	
十七																1	27	58	2	
十八		(欠)		
十九		3							1			2					59	33	1	
二十		2							16	3		4					45	109		
二十一		(欠)		
二十二																	6	8		
二十三		(欠)		
二十四		1															14	64		
二十五																	3	48	7	
二十六		86	2				10		63			21					2	55	18	
二十七		588					8		127	2	2	40			1		10	16	29	
二十八		123					8		78	1	1	41	1				4	1	24	23
二十九		255					9		268			88	1				1	33	15	
三十																	5	56	1	
三十一		(欠)		

この表でわかるように、表紙に記されている三本以外の本との校合も行われているが、まず三本についてみる。前掲のように、昌平御庫本は「官」、狩谷望之蔵本は「掖」、さらに略して「木」、鈴木安寛蔵本は「東」と各々略号が決められているが（以下の略号を用いる）、右の表でみるとおり、それぞれの一本との校異が示されている場合と、このうち二本或いは三本と同一箇所共通の異文をもっていることが示されている場合とがある。また、この三本のいずれかと三本以外の本との組合せもある。

まとめると次のようになる。

「官」本について

①官本一本だけの異文の場合も、数本に共通の異文の場合も、巻二から巻十一までの間にしか見られない。

②数本に共通している異文の場合は「官・イ」と「東・官」との二通りで、「官・イ」は巻一、巻三にのみ、「東・官」は巻二から巻十一の各巻にある。

③「官」校合の総数

巻二—90、巻三—161、巻四—89、巻五—118、巻六—237、巻七—61、巻九—174、巻十一—72、巻十一—3

「東」本について

①東本一本だけの異文の場合と、数本に共通の異文である場合と二通りあるが、いずれも巻十二、巻十三、巻十四、巻十五、巻十七、巻二十二、巻二十五、巻三十の八巻を除く一八巻すべてにみられる。

②数本に共通の異文をもっている場合には、「東・木」「東・官」「東・イ」「木・東・イ」「東・松」「東・松・イ」「東・目六」という組合せが多い。

③「東」校合の総数

巻一—108、巻二—82、巻三—138、巻四—126、巻五—133、巻六—178、巻七—74、巻九—185、巻十—73、巻十一—4、巻十六—3、
巻十九—2、巻二十—21、巻二十四—1、巻二十六—159、巻二十七—727、巻二十八—210、巻二十九—532、

「木」本について

①木本一本だけの異文の場合は巻一に三例、巻二十六に二例あるにすぎない。

②数本に共通の異文をもっている場合は「東・木」という組合せが九四例、「木・東・イ」という組合せが一四例あつて、いずれも巻一に見られるだけである。

③「木」校合の総数

以上の結果、「官」は前半の巻々に限られ、「木」はごく一部、「東」はほぼ全巻にわたってあることになる。日本古典文学全集の解説には、「本文中に、朱にて、それぞれ『東』『椀』『木』として校合した部分がある。しかし後になると、みな『イ』として校合を示すのみである。」とあるが、「東」「椀」「木」とは、「東」「官」「木」の誤りかと思われ、また、「後になると、みな『イ』として校合を示すのみである」とも限らない。

次にこの三本以外のものについて述べておく。まずその校合本の名称が記されている「松」「丹鶴本」「印本」「一本」についてである。

①「松」は後半の巻々に数多く用いられているが、前述の三本と異なる。だが、「松」という略号の本がどのような本なのかの説明はなく、現在のところ不明である。

②「丹鶴本」は巻十一のみに用いられている。これは丹鶴叢書本である。

③「印本」は巻二十七に用いられていて、これは「板本」を意味すると思われるが、『今昔物語集』の板本には、井沢長秀校『考訂今昔物語』(享保五年(前編)・同十八年(後編)刊)と、丹鶴叢書本がある。②に「丹鶴本」をあげているのであるから、これは井沢本を意味していると思われる。井沢本は全くの改竄本であって、本文から適宜取捨したもののだが、この「印本」の書入のある話は巻十四・第十七話として載せられており、確かに書入のような本文になっている。ちなみに丹鶴叢書本、芳賀矢一『放證今昔物語集』(東京帝国大学所蔵、田中頼庸旧蔵本)もこの書入と同じ本文である。

④「一本」は巻十七に用いられているのみで、これの伝本としての性格も不明である。或いは次に述べる「イ」と共通かとも思われる。

これらは一応校合本の名称が示されているものだが、これらの外に「イ」という表示の異文が巻五、巻十一を除く全巻にわたって多数みられる。それらは、巻九までは朱筆であるが、それ以降は殆どすべて墨書である。この「イ」とは前掲の各校合本の異文をも含む総称的な記号なのか、それともそれらとは全く別の一異本の本文を示すのか、また別の一異本だとしても、この多数の「イ」とする異文がすべて或る一本のものに限られるのか、という点は不明である。しかし、「官・イ」「東・イ」などのように並列されていることからして、少なくとも官本、東本とは別の本とみるべきかと考えられる。

前表に「目六」としたのは「目録」で、目録部分の書入である。表の右端から二番目の欄に示した数字は、以上のような異本との校異ではなく本書を書写した人物、そして以上の校合をした人物の手になるであろうと思われる書入(ミセケチを含む)の数を示

す。「イ」とはゞ同様に巻十まではすべて朱筆であるが、巻十一以降は墨書のほうが多くなっている。

これら直接本文の傍に書き込まれたもの以外の書入として、頭注がある。その数も多い。第三表の右端の欄にその数を記しておいた。中国や日本の辞書、資料、また出典と思われる書名を提示した註記もある。また、目録の脚注に出典を註記したところがいくつかある。

四 古本系の中での本書の位置

本書と同じく古本系に属する諸本のうち東大國語研究室本一五冊、国学院大学蔵本、野村家蔵本の三本は、特に本書とほゞ同一の本文で、後二者には「官」「東」「木」の三本との校合もしてあるといわれている。野村家蔵本（以下野村本と略称する）は未調査であるが、他の二本（以下東大本、国学院本と略称する）はその閲覧の機を得たので、ここにこの四本の関係を簡略な形で表示しておく（野村本については大系本、全集本その他の研究書の報告による）。

第四表

本名 巻	実践本	東大本	国学院本	野村本
一	○	○	○	○
二	○	○	○	○
三	○	○	○	○
四	○	○	○	○
五	○	○	○	○
六	○	○	○	○
七	○	○	○	○
八	(欠)
九	○	○ (八)	○	○
十	○	○ (九)	○	○
十一	○	○ (十)	○	○
十二	○	○ (十一)	○	○
十三	○	○ (十二)	○	○
十四	○	○ (十三)	○	○
十五	○	○ (十四)	○	○
十六	○	○ (十五)	○	○
十七	○	○ (十六)	○	
十八	(欠)
十九	○	○ (十七)	○	
二十	○		○	
二十一	(欠)
二十二	○	○ (十九)	○	
二十三				
二十四	○		○	
二十五	○	○	○	
二十六	○	○ (二十)	○	
二十七	○	○ (二十一)	○	
二十八	○	○ (二十二)	○	
二十九	○		○	
三十	○	○ (二十三)	○	
三十一		○ (二十四)		

(◎印は古本系本文)

各本の書誌は既に紹介されているので省略するが、本書との比較のため、二、三の点を記しておきたい。

東大本は巻一と巻二、巻三と巻四、巻五と巻六、巻七と巻九、巻十三と巻十四、巻十五と巻十六、巻十七と巻十九、巻二十二と巻二十五、巻三十と巻三十一をそれぞれ一冊にした合本になっており、計一五冊に仕立ててある（括弧の中の漢数字は、巻の番号を朱筆で訂正してあったものである）。また本文の行数が実践本では巻二十五、巻二十八、巻三十の十一行に書いてあるところが九行に書いてあることが違うだけで、そのほかに違いは殆どなく、本文も殆んど同一である。

国学院本は、巻数、目録・本文の行数、すべて実践本と一致するが、巻十一、巻二十四、巻二十六の三巻が上下二冊に分けられて計二九冊に仕立ててある。本文も同一であり、「官」「東」「木」三本の校合もあるが、校合の結果として掲出された異文の数は明らかに実践本のそれより減少しており、しかも、後の方の巻になるほど、その傾向は強くなっている。また異文は掲出してあるが、その異文のある校合本の名称（「官」「東」など）を省略してあるところが多い。大系本の解説によると、実践本と国学院本は江戸後期に書写されたものとあるが、この校合だけから推定する限りでは、実践本の方が祖本的形態をもっており、国学院本は、その形を省略したものと見るべきかと思われる。

本書は以上の如き本文で、その書写年代は必ずしも古くはないが、『今昔物語集』諸伝本中、古本系統中の善本として貴重な資料であることを認むべきであると思われる。

この資料は、分量が大きいので、本文の翻刻は省略するが、日本古典文学大系と日本古典文学全集との『今昔物語集』には、本書を底本として翻刻した部分があるので、それらによって一応の本文の性質を知ることができると思う。参照されたい。

本調査報告を作るに当って、東京大学文学部国語学研究室、国学院大学附属図書館の御高配によって、貴重な資料を閲覧することができた。深く感謝する次第である。

釋迦如來人衆宿給語第一
 今昔釋迦如來未多佛不感給時釋迦善陸
 申免卑天ノ内院ト云所住給ケル而ニ濁浮提ニ下
 生ト思ヒ時ニ五衰タ現シ給フ其五衰ト云一ニ天
 眼輝ノ事无ニ眼瞬ノ事ニ天ノ頭ノ上ノ花踐
 萎事无ニ萎メ三ニ天ノ衣ニ塵垢ノ事无ニ塵垢
 受四ニ天ノ汗ヲエル事无ニ脇下ヨリ行出キ又五ニ
 天ノ我カ座ヲ不替サレニ奉座ヲ不來ニ當
 所ニ居ヌ其時ニ諸ノ天人善陸此相ヲ現シ給フ見テ

口絵4 「今昔物語」第1冊本文冒頭